

診療録の英語 医学用語教育の視点より (II)

川崎医療短期大学 医療秘書科 一般教養*

山 神 英 子 名木田 恵理子* 岡 田 聚

(昭和61年8月28日受理)

Medical English in Medical Records: Some Thoughts and Research on Vocabulary Teaching (II)

Eiko YAMAGAMI, Eriko NAGITA*, Atsumu OKADA

*Department of Medical Secretarial Science, Department of General Education**

Kawasaki College of Allied Health Professions

Kurashiki 701-01, Japan

(Received on Aug. 28, 1986)

Key words: 医学用語, 診療録, 症状・徴候

概 要

川崎医療短期大学における「医学用語」の教育研究の一環として、診療録における症状・徴候に関する用語の使用状況を調査分析した。対象は、川崎医科大学附属病院の1984年の入院診療録(主訴および現病歴、経過記録)250件である。

調査の結果、症状・徴候に関する記載は英語あるいは医学用語によるものが、圧倒的に多いという結果が得られた。

1. はじめに

医学英語あるいは、医学用語の知識というものは、医療従事者にとって必要不可欠なものである。その効果的かつ効率的な教育は重要なものであろう。そのためには、実地に即した教育計画を無視するわけにはいかない。その考え方に基づいて著者らは、第1回の報告では、入院診療録の退院時要約に記載されている英語を全体的に見て、その使用状況を調査した¹⁾。今回、若干調査方針に修正を加え、調査研究を継続した。

現在、川崎医科大学附属病院では、POシステムによる診療記録の記載を行っている²⁾。

POシステムとは、患者の側に立って医療を

行うというもので、患者の医療上の問題点の一つひとつに焦点を合わせ、それら問題を把握し解決していくものであり、医師のみならず、看護婦、その他の医療技術者(担当者)が積極的に参加して、共同で運営・維持されるシステムである。

診察にあたって、最も重要なことは症状や徴候を知ることであると思われる。症状や徴候の中には診断をするうえで、直接的につながるような特徴的なものもあれば、そうでないものもあるが、正しい診断をするためには両者とも重要な手がかりであると言ってよいであろう。

したがって、診療録に書かれた症状や徴候に関するすべての記載を正しく読みとることが必要とされる。

以上のようなことから、今回の調査研究では、

入院診療録を診療科の限定をすることなく、症状や徴候に関する語を検索してみた。検索にあたっては、医学英語および医学用語の教育のための参考資料収集という本研究の観点から、症状・徴候を表す用語を外国語・日本語を問わず、すべてを抽出し、その使用状況を調べてみた。

2. 調査対象および方法

川崎医科大学附属病院中央病歴室の協力を得て、入院番号順にファイリングされている入院診療録を対象とし、年度は1984年に限定した。診療録の抽出は、入院番号840001から、840011、

表1 科別調査診療録数

	調査診療録数(冊)
内 科	56
外 科	32
小 児 科	30
産 婦 人 科	21
救 急 部	18
総 合 診 療 部	15
形 成 外 科	13
耳 鼻 咽 喉 科	13
整 形 外 科	11
泌 尿 器 科	11
眼 科	11
脳 外 科	5
皮 膚 科	4
心 療 科	4
リハビリテーション科	4
口 腔 外 科	1
放 射 線 科	1
計	250

人間ドックなど症状の記載のない公衆衛生部の診療録は除いた。

840021, 840031 ……と10番ごとに行った。ただし、該当する入院診療録が再入院のため別の番号へ移行されている場合、貸し出されていて中央病歴室にない場合、および症状の記載のない短期診療録や人間ドックの診療録の場合は抽出しないことにした。調査対象とした診療録は250件で診療科の内訳は表1に示すとおりである。同年の科別入院総数の割合は、調査対象診療録のそれと比較すると、結果的に極端な偏りは見られなかった。

今回、検索語を症状・徴候に関する語に限定したため、入院診療録の各種記録のうち、入院の原因となった症状や、主訴と関連した病状について記載される、「主訴および現病歴(Chief complaints and history of present illness)」と、患者が入院して退院するまでの経過が診療ごとに記載される「経過記録(Progress notes)」の2つの記録から調査することにした。

症状・徴候については、“Signs and Symptoms”³⁾に、それらの定義として、次のような記述がみられる。

“As broadly and generally employed the word *symptom* is used to name any manifestation of disease. Strictly speaking, symptoms are subjective, apparent only to the affected person. *Signs* are detectable by another person and sometimes by the patient himself.”

検索語の選定は、上記の定義を基に「内科症候診断学」⁴⁾、「プライマリ・ケア医学」⁵⁾に記載されている症候と、川崎医科大学附属病院入院診療録のGeneral chartのSystem reviewとPhysical examinationのチェック項目、そして、実際の入院診療録の記載用語の3者を照らし合わせて行った。

各入院診療録のChief complaints and history of present illnessとProgress notesの記載より症状・徴候に関する用語を抜き出し、一単語につき一枚のデータカードを作成した。診療録一件中に同一単語が複数出する場合、単語は一語として数えた。

カード全部を用語別に分類し、その数を数えた。

3. 結 果

症状・徴候に関する用語を分類するにあたり、はっきりし得ない部分もあった。そこで、今回の調査研究は、医学英語および医学用語教育のための参考資料収集ということで、分類に関しては特に厳密には考えないで作業を進めた。

(1) 表2は、同じ症状・徴候あるいはそれらに属すると思われる用語を一つにまとめ、出現診

表2 症状・徴候に関する用語の使用状況 (No.1)

	用 語	出現診 療録数 (冊)		用 語	出現診 療録数 (冊)	
熱 (166)	fever	110	排 便 (36)	排便	21	
	(発)熱	26		defecation	10	
	body temperature ↑	15		bowel movement	5	
	pyrexia	15				
浮 腫 (141)	edema (edematous)	83	血 尿 (31)	hematuria	25	
	swelling	45		血尿	6	
	浮腫	13				
食欲不振 (115)	appetite loss	90	腫 瘤 (30)	mass	20	
	食欲不振	24		腫瘤	9	
	anorexia	1		distention	1	
出 血 (105)	bleeding	68	か ゆ み (29)	itching	24	
	出血	24		かゆみ	5	
	blood ↑	9		呼 吸 困 難 (27)	dyspnea	24
	hemorrhage	4			呼吸困難	3
嘔 気 (84)	nausea	72	不 安 感 (27)	mental disturbance	14	
	嘔気	12		不安・イライラ	13	
嘔 吐 (74)	vomiting	58	(血) 痰 (26)	sputum	23	
	嘔吐	16		(血)痰	3	
下 痢 (55)	diarrhea	39	感 染 (24)	infection	20	
	下痢	16		感染	4	
咳 (58)	cough	42	傷 口 状 態 (24)	wound clear	20	
	咳	11		wound good (well) adapted	4	
発 疹 (58)	発疹・発赤	32	瞳 孔 (28)	pupil isocoric round	17	
	eruption	14		pupil anisocoria	3	
	erythema	7		pupil 散大	2	
分 泌 物 (47)	discharge	27	便 秘 (28)	constipation	13	
	分泌	13		便秘	10	
	drip	3	炎 症 (22)	inflammation	15	
	液	3		炎症	7	
疲 労 (44)	leak	1	腹 水 (21)	ascites	19	
	general fatigue	34		腹水	2	
	だるさ	4		震 戦 (21)	tremor	13
疲労感	4	震戦	4			
腹 部 膨 満 (39)	全身倦怠	2	し び れ (21)	ふるえ	4	
	abdominal distention	20		貧 血 (20)	anemia, anemic	19
	abdominal fullness	10			貧血	1
喉 の 状 態 (39)	腹部膨満	9	め ま い (19)	dizziness	7	
	pharynx reddish	18		vertigo	6	
	throat reddish	11		めまい	6	
	tonsil reddish	8		不 眠 状 態 (19)	不眠	13
咽頭 reddish	2	sleep disturbance	5			
血 圧 異 常 (37)	hypertension	15	sleepless	1		
	blood pressure ↑↓	13				
	高血圧	8				
	低血圧	1				

表2 症状・徴候に関する用語の使用状況 (No.2)

	用 語	出現診 療録数 (冊)		用 語	出現診 療録数 (冊)	
歩行障害(18)	歩行障害	8	麻 痺(12)	palsy	7	
	gait (walk) disturbance	6		麻痺	5	
	claudication	3		視力障害(12)	diplopia	7
	limping	1			blurring	2
蛋白尿(17)	proteinuria	11	double vision		2	
	蛋白尿	4	visual disturbance		1	
	尿 protein	2	体重減少(11)	(body) weight loss	11	
肝機能(16)	liver dysfunction	8		乾燥皮膚(11)	skin: dry	11
	liver damage	3	肝肥大(11)	hepatomegaly	10	
	肝機能異常	3		肝肥大	1	
	肝障害	2	排 膿(11)	pus	8	
舌状態(16)	tongue dry	5		abscess	2	
	tongue atrophy	2		排膿	1	
	tongue coated	2		吐 血(11)	hematemesis	7
	tongue moist	2			吐血	4
	tongue straight	2		汗 (11)	(発)汗	7
	tongue whitish	2	perspiration		2	
tongue disturbance	1	sweating	2			
チアノーゼ(15)	cyanosis	13	呼 吸 音(10)	breath (ing) sound	10	
	チアノーゼ	2		た だ れ(10)	erosion	10
黄 疸(15)	jaundice	10	狭 窄(10)		stenosis	9
	黄疸	5		狭窄	1	
けいれん(15)	convulsion	6	脱 水(10)	dehydration	8	
	spasm	5		脱水	2	
	けいれん	4	口 渴(10)	口渴	8	
排 ガ ス(14)	flatus	6		thirst	2	
	排ガス	5	肩 こ り(10)	neck stiffness	7	
	排 gas	3		肩こり	3	
異常感覚(14)	sensory disturbance	8	腹部不快感(10)	abdominal discomfort	6	
	paresthesia	4		腹部不快感	4	
	異常感覚, 知覚異常	2	鼻 閉 塞(10)	nasal obstruction	6	
排 尿(13)	urination	4		鼻閉塞	4	
	排尿	4	発 作(10)	発作	6	
	urine out put	3		attack	4	
嚥下困難(12)	urine discharge	2	動 悸(10)	palpitation	5	
	dysphagia	9		動悸	5	
	嚥下困難	2	リンパ腫(9)	lymphadenopathy	9	
swallowing disturbance	1	眼の偏位(9)		deviation	7	
胸部不快感(12)	chest discomfort		8	exotropia	1	
	胸部不快感	3	偏位	1		
	chest 不快感	1				
硬 直(12)	rigidity	8				
	硬直	4				
うつ状態(12)	mental depression	7				
	うつ状態	5				

表2 症状・徴候に関する用語の使用状況 (No 3)

	用 語	出現診療録数 (冊)		用 語	出現診療録数 (冊)	
排尿困難 (9)	dysuria	7	頻 尿 (6)	pollaki (s) uria	6	
	urinary disturbance	1		骨 折 (6)	fracture	5
	排尿困難	1			骨折	1
色素沈着 (9)	pigmented, pigmentation	6	ヘルニア (6)	hernia (tion)	5	
	色素沈着	3		ヘルニア	1	
胸部圧迫感 (9)	胸部圧迫感	6	嗄 声 (6)	hoarseness	5	
	chest 圧迫感	2		嗄声	1	
	chest compression	1		発話障害 (6)	speech disturbance	5
充 血 (8)	hyperemia	5	発話障害		1	
	充血	3	血 腫 (6)	hematoma	4	
フラフラ感 (7)	フラフラ感	7		血腫	2	
脾 肥 大 (7)	splenomegaly	6	運動障害 (6)	運動障害	4	
	脾肥大	1		motor disturbance	2	
頻 呼 吸 (7)	tachypnea	6	消化不良 (6)	消化不良	2	
	頻呼吸	1		胸やけ	2	
腎 機 能 (7)	renal dysfunction	5		dyspepsia	1	
	腎機能低下	1	heart burn	1		
	腎障害	1				

療録数の多い順に並べたものである(ただし、出現診療録数5冊以下の用語は除く)。そして、各分類群の中では出現診療録数の多い用語より順に並べた。ただし、同数の場合にはアルファベット順に並べ、日本語はその後にリストした。そして、その分類群で最も出現診療録数の多い用語を太字で示した。

その結果、特に高位にあげられる分類群の中で、70.0%以上の出現率を示す英語および医学用語には、appetite loss, nausea, vomiting, diarrhea, cough, general fatigue, hematuria, itching, sputum, dyspnea などがあげられる。

日本語の場合をみると、高位にあげられる分類群の中で、70.0%以上の出現率を示す用語はなく、少し基準を下げてみると、発疹・発赤、しびれがあげられる。

表2に示した症状・徴候に関する用語の出現診療録総数は2005冊で、そのうち、英語あるいは医学用語で記載されているものが、1514冊(75.5%)で、圧倒的に英語あるいは医学用語が使用されているという結果が得られた。

今回、表2にのせなかった用語の中にも、

tachycardia, dysarthria, infarction, pyuria, wheezing, purpura などの基本的と思われる用語が多くみられた。

(2) 表3.1, 表3.2で「痛み」に関する用語を表2と同じ形式で示した(ただし、出現診療録数3冊以下のものは除く)。

表3.1では、「痛み」を部位別に示した。総出現診療録数339冊のうち、部位を表す英語の形容詞または名詞+ pain の形をとっている場合が159冊(46.9%)であるという結果からみると、部位名を英語で覚えることが重要であることがうかがえる。

また、表3.2には「痛み」を種類別に示した(ただし、出現診療録数1冊のものは除く)。この項に属する用語の種類は少なく、予想に反する結果であった。

(3) 表2, 表3.1, 表3.2に示された用語以外で、身体所見事項として、次のような記載がよく見られた。数字は出現診療録数を示す。

lung: (no) rales 85
(no) rhonchi 65

表3.1 痛みを表す用語の使用状況(部位別)

	用 語	出現診 療録数 (冊)		用 語	出現診 療録数 (冊)
腹 痛(84)	abdominal pain	59	季 肋 部 痛(11)	hypochondralgia	5
	腹痛	25		季肋部痛	4
頭 痛(49)	headache	37	足 痛(11)	hypochondriac pain	2
	頭痛	12		足痛	8
胃 痛(27) (心窩部痛)	(epi) gastralgia	15	眼 痛(9)	leg pain	3
	(epi) gastric pain	7		eye pain	7
	胃痛(心窩部痛)	5		眼痛	2
腰 痛(22)	腰痛	11	肩 痛(9)	肩痛	5
	lumbago	8		shoulder pain	4
	lumbar pain	3		歯 痛(7)	歯痛
傷 痛(21)	wound pain	20	toothache		3
	傷痛	1	肛 門 部 痛(5)	anal pain	4
咽 頭 痛(21)	sore throat	15		肛門部痛	1
	throat pain	4	頸 部 痛(5)	頸部 pain	3
	pharyngeal pain	1		neck pain	2
	咽頭痛	1	筋 肉 痛(4)	筋肉痛	3
胸 痛(18)	chest pain	16		muscle pain	1
	胸痛	2	指 痛(4)	指 pain	3
関 節 痛(15)	joint pain	7		指痛	1
	arthralgia	4	神 經 痛(4)	神経痛	2
	関節痛	4		neuralgia	1
背 部 痛(13)	back pain	12	neurogenic pain	1	
	背部痛	1			

表3.2 痛みを表す用語の使用状況(種類別)

	用 語	出現診 療録数 (冊)
圧 痛(105)	tenderness	99
	圧痛	6
疼 痛(19)	knocking pain	11
	疼痛	6
	severe pain	2
鈍 痛(7)	鈍痛	4
	dull pain	3
自 発 痛(4)	spontaneous pain	3
	自発痛	1
排 尿 痛(4)	排尿痛	4
排 便 痛(2)	排便痛	2

abdomen : soft and flat 52
firm 2

heart : murmur 51

gallop 5

heart sound 2

liver (or spleen) : (not) palpable 42

conjunctiva : (not) anemic 56

(not) hyperemic 2

(not) icteric 58

intestinal sound 21

bowel sound 45

general condition (not) good 41

vital sign : stable 23

no complaints 36

no symptoms 4

no change 36

4. まとめ

今回の調査で、症状・徴候に関する記載は圧倒的に英語・医学用語の使用が多かったという結果が得られ、その知識の重要性が感じられた。

また、予想したとおり、独語による記載は極めて少なく、今回検討するほどの出現診療録数はみられなかった。

その他、今回の調査では、症状・徴候は日本語で書かれていても部位、器管名は英語で書かれている場合が、非常に多かったという印象を受けた。

英語を母国語としないわれわれにとっては、原語による専門用語と、それに対応する日本語だけでなく、普通の英語による表記の3者のバランスがとれた学習が重要であり、また、その教育が現実的であると特に感じられた。

謝 辞

今回の調査の計画・実施にあたり多大なご協力と、貴重なご助言をいただきました本学医療秘書科草信正志助教授、および、川崎医科大学附属病院中央病歴室の皆様へ深謝の意を表します。

参考文献

- 1) 名木田恵理子, 山神英子: 診療録の英語—医学用語教育の視点より(I). 川崎医療短期大学・紀要, 第5号, 23-29, 1985年
- 2) 上田智ほか: POMRガイドブック(1). 第2版, 川崎医科大学, 倉敷, 1978年
- 3) MacBryde, C. M. (Ed.): Signs and Symptoms: Applied Pathological Physiology and Clinical Interpretation. 4th ed. Philadelphia, J. B. Lippincott, 1964. p. 1
- 4) 鈴木秀郎, 亀山正邦(編): 内科症候診断学. 東京, 南江堂, 1985年
- 5) 日野原重明ほか(編): プライマリ・ケア医学—包括医療実践のために—. 東京, 医学書院, 1981年

